

Outcome of Renal Transplantation in Patients with Type 2 Diabetic Nephropathy : A Single-center Experience

野口, 浩司

<https://doi.org/10.15017/1500599>

出版情報 : 九州大学, 2014, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

(別紙様式2)

氏名	野口 浩司			
論文名	Outcome of Renal Transplantation in Patients with Type 2 Diabetic Nephropathy: A Single-center Experience			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	北園 孝成
	副査	九州大学	教授	外 須美夫
	副査	九州大学	教授	田口 智章

論文審査の結果の要旨

腎移植は糖尿病性腎症による末期腎不全のための治療として確立している。しかし、2型糖尿病性腎症による末期腎不全における腎移植後の成績に関する研究はほとんどない。申請者は、2型糖尿病性腎症による末期腎不全における腎移植の有用性を検討するため、腎移植患者を対象として後方視的に解析し、2型糖尿病性腎症と非糖尿病性腎症に対する腎移植後の成績を比較検討した。

2008年2月から2013年3月までに生体腎移植を施行した2型糖尿病性腎症患者（DM群）65名と非糖尿病性腎症患者（NDM群）225名の計290名の成人患者を対象とした。これら二群を後方視的に比較検討した。

DM群とNDM群の5年累積生存率はそれぞれ96.6% vs. 98.7%、5年累積生着率はそれぞれ96.8% vs. 98.0%であり両群間に有意差を認めなかった。外科的合併症・拒絶反応・感染症の発生率も有意差を認めなかった。術後心血管系合併症の累積発症率はNDM群よりもDM群で有意に高かった（5年累積発症率8.5% vs. 0.49%; $P=0.002$ ）

2型糖尿病性腎症に対する腎移植後の生存・生着率は非糖尿病性腎症に対するものと比較して遜色がない。糖尿病性腎症患者の透析導入後の予後が不良であることを考慮すると、これらの患者に対し腎移植を行うことは有意義である。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。